

知っていますか？ 「社会科学」という言葉

神戸女学院大学文学部総合文化学科教授 石川 康宏



さて『民医連医療』に、1年間の連載の機会を与えていただきました。今の日本社会について、ちょっと理論的な話もまじえながら、思いつくところを書いてみたいと思います。感想や質問はメールで(walumono0328@gmail.com)お届けください。連載で取り上げることがあるかも知れません。

若い人との話し合いの中で

第1話のテーマは「社会科学」についてです。ちょっと固いですか？ だいじょうぶ。読めば、そうでもありませんから。

先日、大阪で若い人たちと日本の政治について語りあう機会がありました。「安倍内閣が」といったようなお話です。場所が大阪でしたから、もう勢いがなくなってきた橋下さんについてもあれこれと。集まったのは10代の大学生から30代の組合青年部のリーダーまで。それぞれ政治を考え、歴史問題や医療、自治体のあり方などをまじめに考える人たちでした。で、その話し合いの中でぼくが一番驚かされたのは、参加者の誰一人として「社会科学」という言葉を聞いたことがないということでした。一瞬、「絶句」の気分でした。そして、これは、案外大きな「落とし穴」かも知れないぞ、と思われました。

この言葉、みなさんは聞いたことがありますか？

「自然科学」が「自然についての科学」を指すように、「社会科学」は「社会についての科学」を指す言葉です。「社会についての」というだけなら、難しいことは何もありません。かんじんなのは、それもまた「科学」だということです。

この言葉を知らず、そのようなことを考える機会をもたずにきたのであれば、経済学や政治学な

ど、社会についてのさまざまな学問を「科学」として受け止めることができていないのかも知れない。話し合いの中で、ぼくにはそういう不安がわいたのです。

「本当の姿」を探りに行く

そこで話はここからです。「科学」とは一体何でしょう。

こう問われて、みなさんが真っ先にイメージするのは、宇宙の誕生、生物の進化、人体の不思議など、テレビでよく見る個々の「自然科学」の到達点かも知れません。それぞれの領域で、科学者たちは望遠鏡や顕微鏡や薬品、さらには大がかりな実験装置をつかって、自然の「本当の姿」を探り当てる努力をしています。

少し考えてみるとわかるように、ぼくたちの目の前に見える自然は、いつでも「本当の姿」を示しているわけではありません。たとえば夜空の星は、暗い空の平面にペタッと並んでいるように見えています。しかし、それらの星々は、実際には銀河系と呼ばれる渦を巻いた円盤のような形をつくっています。また星の並んだ平面は、地球をまわっているように見えますが、そう見えるのは、反対に地球が自転しているからでした。さらに宇宙は昔からまるで姿を変えないように見えますが、本当はインフレーションやビッグバンの瞬間から、今もずっと膨張を続けています。

このように、目に見える世界を入り口に、それが目に見える姿で現れてくる自然の「本当の姿」を探り当てていくのが「科学」です。そうした探求の行為ととともに、その成果もまた一般に「科学」と呼ばれています。

地球は自転している、宇宙は膨張しているなど、

地球や宇宙の「本当の姿」についての認識は、科学的認識と呼びかえることもできます。科学的認識は、観察や実験などに裏付けられたものでなければなりません。それは「本当の姿」をどのように正確にとらえているのか。その点についての証拠が必要だということです。

ですから「ほくはこう思うよ」「どうして?」「いや思うだけ」という思いつきのたぐいは、どんなに立派な「本」に書かれていても、科学の範囲には入りません。また、科学的認識は、探求の積み重ねによって中身が変わっていきます。つまり「科学」は「すべてがわかった」という完成品ではなく、「今ここまでわかっている」という、いつでも変化の途上にあるものです。科学者たちは「ここまでわかった」ということの「ここまで」を、より広いものにしようと努力しています。

社会科学も同じように

「社会科学」は同じことを、社会を相手に行うものです。人間社会の「本当の姿」を探り、その成果を順に積み上げていくものです。

社会もまた、ほくたちに、簡単に「本当の姿」を見せてはくれません。たとえばボールペンとコーヒーが同じ100円なのは、販売者が自由に決めた結果のように見えてきます。しかし、実際には商品の価値は、それをつくるのに必要な労働の量に縛られているのでした。また賃金が労働力の価値でなく「労働の対価」に見えるのは、それが労働力の消費の後に、労働時間に応じて変化する額で支払われるからです。さらに人間社会の変化はもっぱら歴史の偉人に左右されるように見えますが、逆に偉人の行動こそ、社会の発展段階に方向づけられているというのが本当です。

このように社会学者は、目に見える社会の背後にある、その「本当の姿」を探求しています。経済学、政治学、歴史学、社会学などは、人間社会のどの部分を、どういう方法で探求するかによって区別されています。そして、これらの学問による科学的な認識も、自然科学と同様、データによって裏付けられたものでなければなりません。社会学者も、新聞、統計、史料などを分析し、フィールドでは実際に社会の観察を行うわけです。書店には、このような裏付けをもたない「思いつ

き」を書いた本が、「社会科学」の入門書のような顔で並んでいることがありますから、みなさんは十分注意をしてください。

自由な意思と社会の法則

社会は自然と違って個人の意思に左右されるから、自然のように客観的な法則は成立しないのでは。これは「社会科学」が「科学」として成り立つ上で、大きな壁となった問題でした。

まず世界の歴史についての究明が、これにひとつの答えを与えていきます。具体的な姿はさまざまですが、どこも国や地域にも、大雑把には原始的な共同社会から、古代の奴隷制社会、中世の封建制社会、近代の資本制社会へ向かうという社会発展の方向性が見出されました。これは多かれ少なかれ学校の教科書にも反映されていることです。

では、そのような方向性の共有と、たとえば日本やヨーロッパにくらす個人の意思との関係は、一体どうなっているでしょう。

たとえば、ほくには高い熱が出れば、仕事を休む自由があります（ちょっと肩身は狭くなりますが）。しかし、来年1年間を遊んでくらす自由はありません。それでは生活ができなくなってしまうからです。また、ほくには買い物に行くかどうかを決める自由があります。しかし、そこで毎回100万円をつかう自由はありません。お金がそんなにないからです。

このように個人の自由な意思は、その人の社会的な立場や社会の仕組みに、大きく制約されています。ほくの場合には、誰かに雇われて働き、そこで受け取る賃金で生活する労働者だということが、意思の範囲を定める大きな要因となっています。それはヨーロッパにくらす労働者にとっても同じです。同じ資本主義の社会で、同じ労働者として生きるということが、互いの連絡があらうとなかろうと、それぞれの自由を同じような範囲に制約し、同じような方向に向けさせるのです。

つまり個人の自由な意思は、法則が個人の意思を通じて貫かれるという、自然の世界にはない独自の特徴を社会の法則に与えますが、法則の存在そのものを否定するものではないのです。

いかがでしょう。次回からは「社会科学」の中身に入っていきます。